

卒業生は今

砂川有里子

人文社会科学研究科教授

巣立っていった人々

日本語を母語としない人々に日本語を教える「日本語教育」という分野を専門にしている立場上、世界のさまざまな地域での学会や研修会に参加する機会があります。その時いつも楽しみにしているのは、筑波大学を巣立っていった人々との再会です。筑波大学には日本語教師を育てる学類や大学院がありますから、そこを卒業した人たちの多くは日本国内や世界各地の教育機関で日本語を教えています。その人たちとあらかじめ示し合わせて出張先で会うこともあります。まったく予期せぬところで思いもかけない邂逅に恵まれることも少なくありません。日本語教育に進んだとは思っていなかった人にチェコの会議でばったり出会ったり、何年も音沙汰のなかった人に韓国の学会で声をかけられたり、といったようなことが結構ありますので、どこかの国で会議があるたびに、今度は誰に出会え

るかしらと期待に胸がふくらみます。

日本語教育に進んだ人たちとは、このように、何かの折りに会う機会が少なくありません。国内で毎年開かれる日本語教育学会の研究大会では、筑波大学の同窓生と定例の食事会を開いてもいます。しかし、日本語教育以外の分野に進んだ人たちにはそう滅多に出会えるものではありません。「みんなどこでどんなことをしているのかな」、「どんな大人になったのかな」、といつもどこかで気に掛かっていたのですが、ちょうどそんな折に、日本語・日本文化学類が開設20周年という記念すべき年を迎えようとしていることに気づきました。この機会に卒業生が何をしているのか調べてみたいし、卒業生たちの声も聞いてみたい。そう思って卒業生の何人かに声を掛けてみたところ、全員すっかり意気投合し、卒業生のエッセイ集を刊行しようという話がまとまりました。日・日学類の先生方も協力して

下さって、2005年3月に『一世界にはばたく一卒業生は今』という270ページを超えるエッセイ集が完成しました。

この誌上をお借りして、これらのエッセイにつづられた卒業生の声をみなさんにお届けしたいと思います。

卒業生の声

『一世界にはばたく一卒業生は今』という書物には卒業生へのインタビュー記事と卒業生に対するアンケート調査報告の他に15本のエッセイが収められています。これらのエッセイは「海外での日本語教師」「国内での日本語教師」「国語教員」「会社員」「公務員」「出版社員」「テレビ局員」など、さまざまな分野で活躍している卒業生たちから寄せられたものです。そこには、天職を得て生き生きと仕事に打ち込んでいる人、迷う気持ちと向き合いながら前向きにチャレンジし続けている人、さまざまな経験を経て自分の納得できる仕事に出会った人、仕事に就いてようやくアイデンティティーを確認できた人などなど、誠実に、そして真剣に今を生きようとしている若者たちの姿を読み取ることができます。社会人になるまでの不安、社会人になってからの紆余曲折、仕事を手に入れるまでの苦労といった決して平坦ではない彼らの歩みの軌跡と、大学時代を振り返っての楽しい思い出や後

輩たちに対する暖かい励ましの言葉がつづられています。わくわくするような楽しい語り口で自分の仕事を紹介してくれる人や日々悩みながらも最善を尽くそうと努力する人たちの言葉からは、自分の生きざまに対する熱い思いが伝わってきます。

長年大学教員を務めてきて、ともするとマンネリ化してしまいそうな私にとって、これらの言葉は大いなる叱咤激励の声となりました。同じように、エッセイを書いている卒業生自身にとってみても、自分の大学時代を振り返るという作業は、初心を振り返るよい機会となったようです。中高一貫校で国語教員をしている片岡真由さんは次のように書いています。

次々と出てくる新たな課題に日々悩みながら、教員になったことの意味をもう一度考えているこの時期、大学時代と現在のつながりについての文章を書くことは、もう一度自分の求める「わくわくする瞬間」を思い出す大切な作業となりました。(高知県立中村中学・高等学校教員・片岡真由)

大学時代、部活に明け暮れ勉強に身を入れなかったという登里民子さんは次のように語っています。

最近切実に思うのですが、いったん社会

に出てしまったら、何かを学ぶ・教えていただくチャンスや時間はなかなかありません。もう一度学生時代に戻れたら、こんどはすべての授業に出席して寝ないで聞くことを誓います！

こんな彼女も、さまざまな経験を経て、自分の人生を次のように堂々と語ってくれました。

人生半ばの私が語るのはおこがましいのですが、人生には時によっていろいろな風が吹くと思います。無風・微風・軽風・順風・強風。それぞれの風を、時にはセールいっぱい受け、時には港で帆を下ろしたりしながら、これからも日本語教育の海をゆっくりと渡っていきたいと思っています。Where there is a wind, there is a way. (国際交流基金日本語教育専門員・登里民子)

「中国帰国二世」という運命を背負い、それまで異国だった日本で暮らさざるを得なくなった長江春子さんは、中国の初等・中等教育における日本語教育支援という天職ともいえる仕事を得て、それまでの自分を次のように振り返ります。

二つの言語と文化を持つがゆえに日本と中国の間でさまよい、分裂してしまっていた

アイデンティティが、今の仕事を通じて統合され、場面と必要に応じて中国人である自分と日本人である自分との間を自由にスイッチングできるようになり、自分らしく生きていく大きな自信につながりました。「変な日本語」を話し、「変わった行動」をとるために、よく仲間はずれにされた中学や高校時代を送りましたが、日本語のハンディを克服したい一心で日・日を選んだこと、自分を探す旅にと協力隊に入ったこと、そしてその時々のお会いが、これほどまでに自分を変えるとは思いませんでした。人生に無駄な経験はなにも一つない、分からない先のことをあれこれ思い悩むよりは、その時その時を一生懸命に生きれば、それなりに開けてくる、ということを学ばされた思いがします。(財団法人国際文化フォーラム職員・長江春子)

偶然のお会いに導かれつつ夢中で歩み続けていた自分を振り返って語るのは、国際交流団体で働く水野真さんです。

もしあの時、先生にアドバイスを受けていなかったら、もし、あの仲間達に出会っていなかったら、もし、筑波大学の日本語・日本文化学類に入学していなかったら、と今でも思うことがある。しかし現実には、筑波大学との出会いが、そしてそこでの多

くの人との出会いが、私を現在の職場へと導き、今の私がある。「偶然」に引き寄せられるように、しかし、はかったように私は今の職場に足を踏み入れた。筑波大学を受験したあの日から今日まで、まるで一本の見えない糸によってつながっていたものが、今にしてみれば、こうして目に見える形になりつつあるのを、不思議に、そして魅力的に感じている。(国際交流協会職員・水野真)

紆余曲折しながらも人生について率直な思いを語ってくれているのは、国家公務員の永井一郎さんです。

社会人になって6年目、ついに三十路の仲間入りを果たした私ですが、いまだによくわからないことがあります。「自分は何がしたいのか？」それは学生時代の就職活動の時にも問い続けていたことですが、その答えはいまだ闇の中です。…(中略)…でも、私はこれからも問い続けていくつもりです。「自分は何をしたいのか？」と。(総務省統計局員・永井一郎)

迷いつつ、悩みつつ、真剣に自分の道を模索する彼らの姿は、遙か昔に大学を卒業した私の胸に甘く切ない思いを呼び起こし、新しい活力を与えてくれるのです。

『一世界にはばたく一卒業生は今』をご希望の方は、日本語・日本文化学類(内線6764)にご連絡ください。

(すなかわ ゆりこ／日本語学・日本語教育)